

ロボットに対する肯定的・否定的意識および保育・教育への導入に対するニーズの検討

佐久間 路子

研究実績の概要

本研究では、人々がコミュニケーションロボット（以下ロボット）との関わりに対してどのような意識を持っているのかを明らかにするために、アンケート調査およびインタビュー調査を行った。アンケート調査は、6つの大学・短大の学生798名（理系165名：男性129名女性36名、文・教育系633名：男性121名女性512名、平均年齢19.9歳）を対象に、ロボットと関わった経験・頻度、ロボットと一緒に暮らすことへの希望、保育・教育・介護分野における仕事の代替可能性とそれに対する意識、ロボット否定的態度尺度（NARS）などを含むアンケートを実施し、性差や専攻分野による差異を検討した。

結果として、ロボットと一緒に暮らしたいかという質問に対しては、理系学生の方が文・教育系学生よりも「（非常に・やや）そう思う」傾向が高かったが、理系学生でも約半数の学生が「（全く・やや）そう思わない」と回答していた（図1）。さらにその理由（自由記述）を質的に分類したところ、

ロボットと暮らすことで有益な点や肯定的感情への変化に関する意見もあったが、「家族や友人がいるので必要ない」という意見が多くみられ、大学生は、コミュニケーションロボットは一人暮らしで孤独を感じている人が対象と捉えていることが考察された（これらの結果はHRI2019にて発表*）。保育・教育・介護分野における仕事の代替可能性について（分析中）は、高齢者の話し相手については比較的肯定的な回答であったが、子どもとの関わりについては否定的な意見が非常に強かった。同様のアンケートを、保育者対象に実施し40名から回答を得ており、今後、大学生との差異を検討予定である。

インタビュー調査では、ロボットとの関わりに対する否定的意識の詳細を探るために、大学生（15名）を対象に自分自身がロボットと関わるだけでなく、他者がロボットと関わることにに対して抱く感情についてたずねた。今後、さらに対象者を増やし、分析検討を行う予定である。

* M. Sakuma, K. Kuramochi, N. Shimada, & R. Ito "Positive and Negative Opinions about Living with Robots in Japanese University Students," The 14th ACM/IEEE International Conference on Human-Robot Interaction (HRI2019), 2019, Late-Breaking Reports no.63.

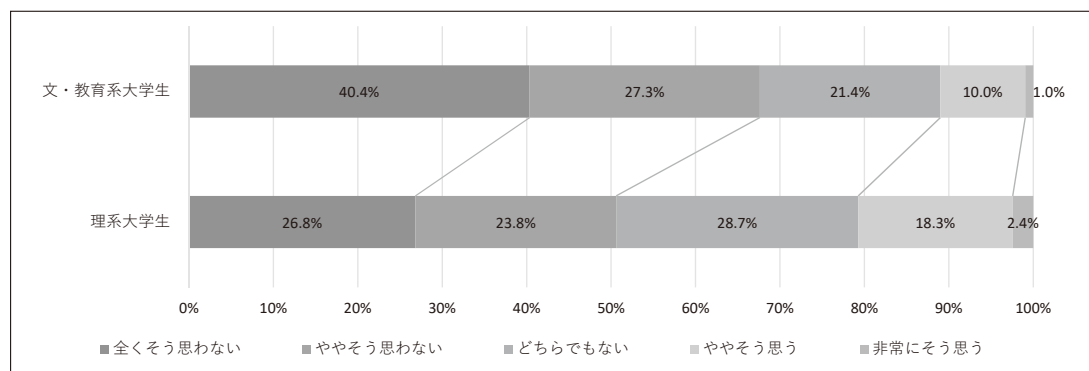


図1 コミュニケーションロボットと一緒に暮らしたいか